

# 序文 「沖繩研究」における理論と出来事

井上岡従文

「沖繩」において／をめぐって、理論的であるとはどのような知性のあり方なのだろうか。なぜ今現在、「沖繩」という場所、問い、出来事をめぐって理論的であることが求められているのだろうか。

たとえば沖繩社会をめぐる語りにおいて、「ネーション」「文化」「言語」「主体」といった諸カテゴリーを超歴史的な基体として措定した上で、これら諸基体に時間的に後発的であり、空間的に可変性を既に限定されたものとしてのみ多様性や他者性を空想する傾向が定式化していかないだろうか。すると一見差異と生成に開かれた沖繩研究を目指す語りの中に、差異と生成の基盤として既に規範化された人種像とジェンダー像があり、それらが権力の作用の彼方および以前にあるものとして措定されていることが透視されてしまう。こうした沖繩像とそれを下支えするナショナルティおよびジェンダーなどの規範が自然化される過程は、酒井直樹が問題化して来た「対形象の図式」におけるナショナルティの配分と構成の追認でもある。そしてそれは、この図式に沿って諸ネーション・ステート形態をローカル媒体として利用することで資本と軍事を循環させる現在の米国を中心に据えた帝國的権力のあり方の枠内で思考することにもつながる。

また日本語の学問空間において「ポストコロナリアル研究」に関わることを自認してきた研究者の一部は、本質主義的な発話や、「保守層」の「協力者（コラボレーター）」と見なされる者達のテクストにおける種の過剰やゆらぎに着目するといふ、それ自体には生産性のある方法論を、これら発話者たち本人への同情へと横滑りさせる傾向を示してきた。こうした感傷的とも言える態度は、それが人種化された感傷である限りにおいて、「現地」における知の権力のあり方への批判を欠いており、したがって「現地」においてネーション・ステート形態、人種主義、強制的異性愛主義などを批判してきた思想・運動・芸術などの蓄積を総じて看過してきた。

このようにして「理論」を「非現地」へと空間的に集約することで、素朴な「実証・経験主義」を「現地」に配分する傾向

は、「現地」における理論の運動を看過し、「現地」にて理論を捨象することで成立する権力のあり方を問えない。またこの配分を介して、「沖繩」という「現地」にとつての「非現地」としての「本土」という「現地」の形象の輪郭が与えられるならば、それはライシャワーやマッカーサーなどによって考案されジョセフ・ナイなどへと引き継がれる「戦後日本人」という米国にとつての翼賛マイノリティ的な主体を反復する危険を多分にはらんでいるのではないか。

本特集は「沖繩研究」において問われることが未だに稀である、こうした「理論」と「実証」の人種化を施された空間化に依拠する知の植民地的編成を問うことを目的とした。

既存の「沖繩研究」が自明な所与として制度化される諸カテゴリーを無批判に受容し、その受容の枠にそってそれら諸カテゴリーに従属する研究を繰り返す傾向にあるのなら、こうした受容と能動の悪循環にとつての問いを強制するものが出来事であろう。この問いとしての出来事は感性、知性、記憶がこれまで感じる事が出来ず、思考し得ず、記憶し得なかったからこそ感じられ、思考され、記憶されなくてはならないものたちを召喚する諸力の総称でもある。感性（実証）と知性（理論）が追認・再認の対象としてのみ事物を表象するという悪循環の回路を断つものとして、出来事の到来とその受容ならざる受動の経験があると言える。

寄稿者および鼎談参加者の方たちは世代、ディシプリン、来歴などを異にしており、すべての意見において一致を見るわけでも当然ない。微細な、あるいは顕著な違いが対話を成す過程を読み取っていただければ幸いである。そして、これらの方々の研究に共通するのは、出来事の経験において方法論や理論を鍛錬することと、経験主義・実証主義的カテゴリーを図式化し追認する類の「沖繩研究」を批判的に乗り越えることが不可分なものとして繋がっている点である。この点において、本特集に寄せられた諸論考から浮かびあがるのは、沖繩とその外をめぐる研究の中から新たな人間関係を紡ぐための投企であり、それを可能とするための協働のあり方でもある。